

アメリカ合衆国, メキシコ道中記

第3 (電気・電子) 工学系 講師

石田 誠



私にとって海外出張は初めての経験であり、期間が2週間と短くても内容の濃い旅であった。1983年10月2日に成田を出発し、IEEE主催のSOS/SOIのWork Shopが開催されるWyoming州のJackson Holeへと向った。Jacksonは夏、アメリカ最大の国立公園であるYellow StoneとTeton国立公園のベースキャンプ地として、また冬、スキー場として観光客でにぎわうロッキー山脈のふもとの町(標高2000m)である。そのため10月はシーズン・オフで飛行機はSalt Lake Cityから1日1便しかないののでSan Franciscoで時差のため眠れない夜を過ごし、3日にJacksonへと移動開始することになっていた。San Franciscoでは初日、ダウン・タウンへ行っただけだったためか日本の都市とさして大きな違いはないようで、初めて海外の地に着いたにしてはそう興奮している様子はなかった。今から思うと、嵐の前の静けさだったのか？

とにかく翌日の10月3日、研究発表地であるJacksonへ向けてWestern Airlineの便でSalt Lake Cityに行った。飛行機から見る大陸は日本と違い広大な緑の見えない平地や丘が続いていた。この辺までくるとアメリカに来たのだという実感と緊張感がだんだん出てきた。今回の旅行は中村先生と一緒にであるし、発表のための準備をあまり日本でやっていなかったの、終始ペチャクチャとこんなにも喋ることがあるのかと驚くほどにぎやかなアメリカの団体さんの中で、ひたすらSan Franciscoまで原稿を練り直していたためそんな感慨にひたっている余裕がなかったのかもしれない。そうこうしている間に飛行機を乗り継ぐSalt Lake Cityに12時25分に到着した。Jacksonへの便は13時45分だから昼食でもしようかとカフェテリアへ何の疑いもなく行った。食事をしながら、のんびりと飛行機が離陸するのをながめているとき、ふと私の頭の中をいやな予感が走った。「ここSalt Lake CityとSan Franciscoは時差があったのでは？」。このことを中村先生へ言い、二人で乗る予定の5番ゲートへかけつけ、チケットを見せると、かわいいカウンターのお嬢さんが、